

鞠智城に残る渡来系技術

長谷部善一（熊本県教育委員会）

1 はじめに ―鞠智城とは―

鞠智城は熊本県北部、現在の山鹿市と菊池市の2市にまたがる^{よなぼる}米原台地上に位置する7世紀後半、今から約1,350年頃前にヤマト政権によって築かれた古代山城である。

当時朝鮮半島では高句麗、百濟、新羅の三国の争いに中国の唐が加わり、社会的な緊張が続き、660年、唐・新羅連合軍によって日本と友好関係にあった百濟が滅ぼされた。日本（当時は「倭」と呼称）は百濟の復興を支援するため援軍を送るが、663年に白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗し、今度は唐・新羅による国内への侵攻の脅威に直接対処せざるを得ない状況となった。

そこで、ヤマト政権は西日本を中心に防衛体制を形成し、九州対馬に最前線基地として金田城（長崎県）を築城し、当時、「遠^{とほ}の朝廷^{みかど}」と呼ばれていた大宰府を防衛するために大野城（福岡県）・基肄城（佐賀県・福岡県）が築かれている。これらの背後に位置する鞠智城は城として防衛施設であったと同時に、食料や武器を最前線へ供給するための兵站基地として同じ時期に築城されたと考えられる。

鞠智城は築城に関する文献の記載はないが、これまでの発掘調査成果等から7世紀後半頃に、大野城・基肄城とともに築城されたと考えられている。698年には大野・基肄の2城とともに鞠智城の「繕治^{ぜんち}」（修理）がおこなわれたとの記事¹があり、初めて鞠智城が文献に出てくる。その後、朝鮮半島の緊張緩和が進むと城としての機能を維持しつつ、「コ」の字型配列の大型建物や八角形建物など、役所としての機能も整備された。更に倉庫群は掘立柱建物から礎石建物に変化し、米などを貯蔵した倉庫群が大型化するなど城の機能を変化させながら存続した。

鞠智城は、対外的な緊張がなくなった時点で廃止された他の古代山城とは違い、古代律令国家にとって地域支配に重要な城として約300年間存続し、平安時代末にその役割を終え「米原長者」の言い伝えを残し、歴史から消えた。



鞠智城米原地区

2 これまでの鞠智城研究の取り組み

昭和 42 年（1967 年）に地元研究者により第 1 次発掘調査が実施された後は、熊本県教育委員会が主体となり、令和 4 年（2022 年）までに 37 次に及ぶ発掘調査を実施してきた。その結果、周囲約 3.5 km、面積約 55ha に及ぶ城域、うち南・西側の城域線上で土塁、3 箇所
の城門、長者原地区から長者山地区にかけて 72 棟の建物群、国内では初確認となる貯水池跡など多くの遺構を確認した。更に国内の古代山城からは初めての出土となる「銅造菩薩立像」が出土するなど、国内の古代山城の中でも調査・研究が最も進んでいる城の一つとなった。

鞠智城を管理する鞠智城・温故創生館では、平成 24 年（2012 年）3 月に刊行した『鞠智城Ⅱ－鞠智城跡第 8 次～32 次調査報告』²で得られた学術的知見を熊本県文化財専門職員のみならず外部の研究者にも広げるため同年から、若手研究者を対象に「特別研究」として研究の公募を開始した。公募する分野は考古学、文献史学、歴史地理学、建築学、土木学及び美術史学等、多岐にわたり、採用された研究者には研究費を助成するなど、新たな視点からの研究を進めてきた。その研究成果は毎年、成果報告会を開催するとともに、『鞠智城と古代社会』として取りまとめ公開している。これまで延べ 48 名の研究者が鞠智城研究を深めてきている。

また、調査研究事業とは別に、平成 16 年（2004 年）5 月の史跡指定を契機に、更に鞠智城を知っていただき研究の深化を図り全国の古代山城との比較研究等を行い、研究促進を図るため佐藤信氏のコーディネートのもと多くの古代山城研究者、各分野の皆様の御協力によりシンポジウムを開催し研究の蓄積を図ってきた。史跡指定を受けた同年には地元菊鹿町（現・山鹿市菊鹿町）で第 1 回シンポジウムを開催した。更に翌年には鞠智城を全国の方々に知っていただくため「鞠智城東京シンポジウム」を開催し、その後、大阪府、京都府、福岡県でも開催してきた。令和 2 年（2020 年）から流行した新型コロナウイルス感染症対策期間も、オンライン開催や、熊本県内で感染症対策を取ったうえで継続し開催してきた。本年度、東京での開催は平成 30 年（2018 年）以降、5 年振りの開催となる。改めて、鞠智城を全国の方に知っていただき更なる研究の深化を図って参りたい。

3 鞠智城に残る渡来系技術

ここでは本日のテーマに沿いこれまでの発掘調査及び研究の成果から、鞠智城に残る渡来系技術について紹介する。そのためここでは昨年度に熊本市で開催した鞠智城シンポジウム「渡来系技術から見た古代山城・鞠智城」をベースにこれまでの研究で渡来系技術と報告されてきた内容を改めて紹介し、最後に近年私が研究に取り組んでいる情報を交え報告したい。

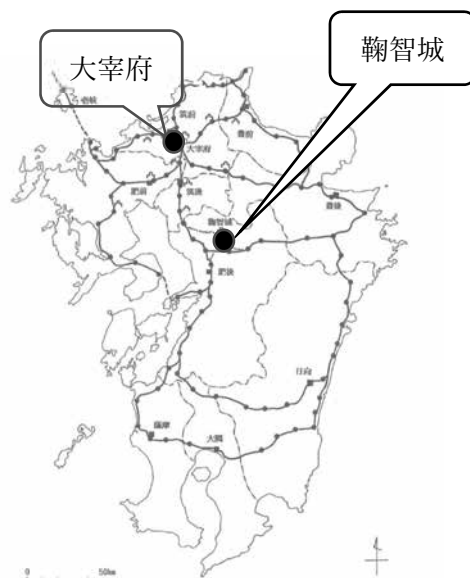
(1) 選地

最初にも述べたが、鞠智城は古代山城としては最も南に位置しており大宰府から直線距離で約 60 km の位置にあたる。最も近い朝鮮式山城である基肄城からもほぼ同距離の位置に位置し、^{こうごいし}神籠石系山城として知られている^{こうらさん}高良山神籠石（福岡県久留米市）、^{ぞやま}女山神籠石（福岡県みやま市）からも当時から国境であった筑肥山地の山塊群により遠く隔てられている。

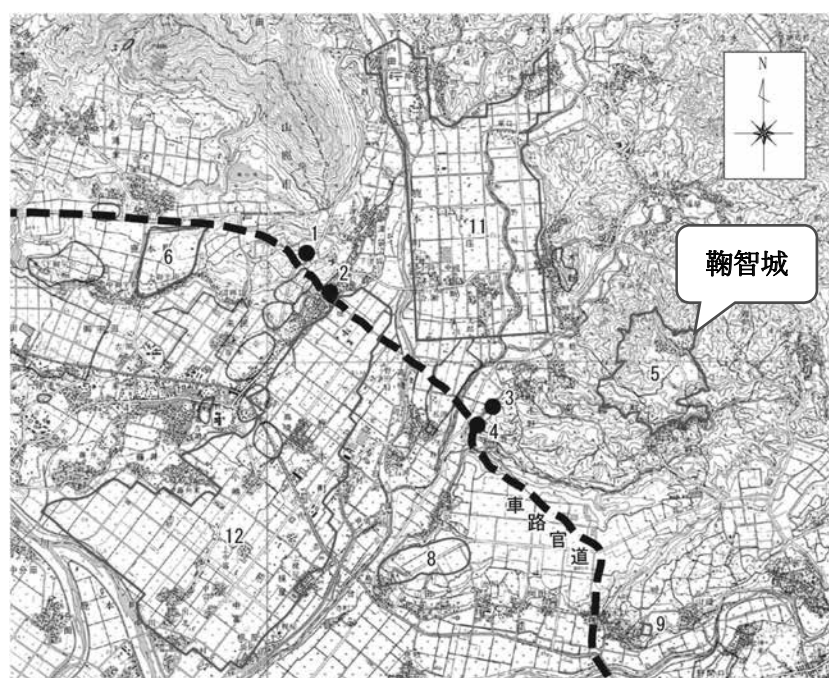
平成 23 年（2011 年）8 月に第 2 回古代山城サミット（事務局山鹿市・菊池市）のプレイベントとして^{とぶひ}烽火リレー実験³が実施された。実験の結果、大宰府政庁跡から鞠智城まで 14 箇所（約 100 km）を結び、約 1 時間で烽火が届いている。

遠く離れた肥後国北部でも緊急時にもこれだけ短い時間で連絡ができたことから大宰府周辺で万が一戦いが生じて兵站を担う城として十分に連絡がつくとして、鞠智城がこの地に選地されたと考えられる。

また、鞠智城が所在する菊池川中流域は肥後国内でも有数の穀倉地帯で古代の条里である^{きくか}菊鹿盆地を有し、食糧の確保と言う観点で選地にあたった重要な要素だったともえられる。しかし、他の古代山城と比べ低い丘陵上を選地している点や、外部からの視認性の低



西海道の駅路と鞠智城



車路官道（点線）と鞠智城

いこと等も挙げられる。そこで肥後国北部の米原台地に選地された理由を考えてみたい。

鞠智城が立地する熊本県北部域は約9万年前に堆積した阿蘇4火砕流により覆いつくされ、菊池川等による浸食で河岸段丘を形成し、更に流域に沿い沖積平野を形成する。鞠智城は火砕流堆積物上の小規模な平坦部を取り込む形で周囲に小河川による谷地形を利用し、独立した丘陵と自然の土塁状地形を呈する。南側にはうてな台地が近接していることから直接城内を望むことはできず外部からの視認性は低い。現在でも城の位置を外部から特定するのは難しい。

大野城、基肄城、^{きのじょうさん}鬼城山（岡山県総社市）などの大半の古代山城は、外部からの視認性を意識しているが、鞠智城では外から見えない分、内部の平坦地に建物を集中的に配置するなど他の城との違いもある。このような土地を有していたことが、ここに築城し兵站基地として秘匿性を持たせる意味があったとも考えられる。戦う城、見せることで威圧する城、そして鞠智城のように兵站のため秘匿する城としての築城思想があった可能性も高い。

（2）土塁・城門

選地のところでも述べたが、鞠智城が築城されたこの地域は火砕流堆積物が削り出した地形がよく残り、随所に痩せ尾根状地形が残る。うち、復元建物群の整備が進む長者原地区南側に所在する土塁線上には「堀切門」^{ほりきり}、「深迫門」^{ふかざこ}の2つの城門が確認され、南側、西側土塁線の結節点では「池ノ尾門」^{いけのお}が確認されている。

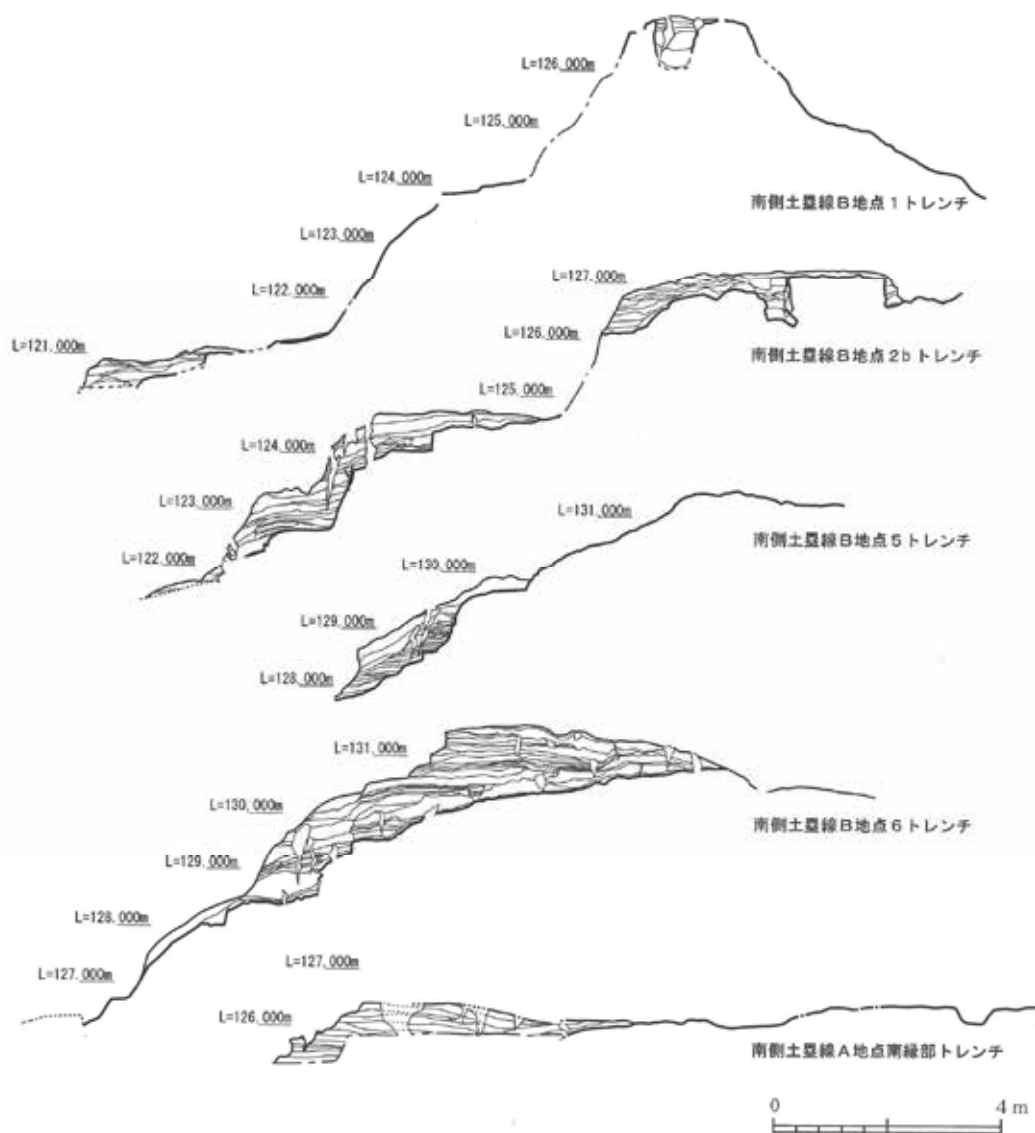
南側土塁線上に所在する2つの城門は、南側に^{くるまじ}車路（古代官道の一つ）が東西方向に整備されていることから、人の出入りを意識した城門と考える。また、南・西土塁の接点に所在する池ノ尾門は、西側に菊池川の支流である内田川がすぐ近くにまで流路を寄せていることから、有明海とつながる川船を使った物資搬入路として機能していた城門であると考え

る。これら城門は土塁線上に位置しており城として防衛施設の一翼を担う。城跡を考える上で重要な定義の一つに、岡田茂弘氏⁴が示されている基準を用いると、「防衛的構造物＝自由な出入を規制する施設の遺構の存在」がある。



深迫門跡発掘調査地区（中央は花崗岩製唐居敷）

このような地形を利用し当時、我が国に城壁築城技術の一つとしてもたらされた「版築」技術を用いて積まれた土塁が発掘調査で確認されている。南側土塁では尾根地形を段築状に成型し高所側に版築を用い土塁も築かれる。現存している土塁は版築の基底部だが、その幅は5m以上に及ぶところもありそこから復元される版築土塁の高さは数メートルに及ぶ。西側土塁線上でも版築技術を用いた場所が発掘調査で確認されており、城外に向い急斜面上の崖線に土塁が築かれた土塁が確認できる。



南側土塁線トレンチ断面

(3) 貯水池跡

長者原地区の西側、米原集落の南側に所在する谷部から平成8年(1996年)に古代山城では初となる貯水池跡を確認している。調査の結果、約5,300㎡の貯水池であることが確認され、貯水池内からは後に触れるが鞠智城内で使用されていた建築材や祭祀に使用された

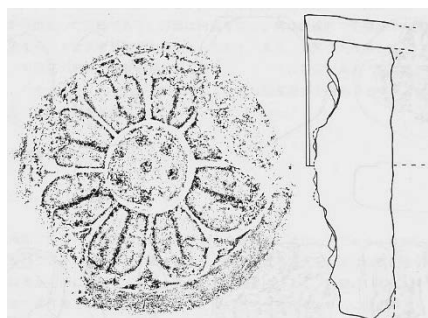
であろう木製品、銅造菩薩立像が出土している。

令和3年度（2022年度）鞠智城「特別研究」事業において全赫基氏⁵は、鞠智城で確認された貯水池跡を朝鮮半島の古代山城の一つである河南二聖山城^{にせいさんじょう}貯水池跡と比較した。その結果、韓国に残る古代山城の集水施設における祭儀的行為に類似性があるとし、貯水池跡出土遺物の比較等から古代朝鮮渡来系技術の一つと指摘している。また、令和4年度（2022年度）熊本県で開催した鞠智城シンポジウムで小山田宏一氏⁶は、鞠智城で確認された貯水池跡が上流側と下流側で約9mの比高差があること、また、水を貯める施設であることに注目し、上流側・下流側の貯水池内で与えられた役割が違っていたのではないかと指摘した。上流部では湧水を利用する泉井と貯木場として利用し、下流では粘土で流れを止め、水を溜め、曲池として利用していたのではないかとの見解を示した。貯水池跡が曲池であると仮定した場合、朝鮮半島の事例を提示し貯水池跡の形状等から、新羅からの影響を示唆している。併せて、貯水池跡から検出されている堤防状遺構で確認された「敷粗朶」^{しきそだ}について、地盤工学で使用される補強土工法と言う用語を用い、中国江南地方の良渚文化期（紀元前2,000年代）に登場したこの技術を、東アジア起源の技術として捉えている。

（4） 出土遺物

① 瓦

鞠智城では軒丸瓦、丸瓦、平瓦の3種類の瓦が出土している。うち軒丸瓦には、「単弁八葉蓮華文」と呼ばれる蓮の花をかたどった文様が施される。これは朝鮮半島の瓦の文様の影響を強く受けたものと考えられている。



軒丸瓦（単弁八葉蓮華文）

② 銅造菩薩立像

菩薩立像は貯水池跡の池尻部底部から出土した。高さ12.7 cm、最大幅3.0 cmで横から見ると体部がS字曲線を描く。顔の表情は丸みを帯び穏やかで、三面の宝冠、肩まで垂らした垂髪、両肩にかけられた天衣などもよく表現される。また、舍利容器と考えられる持物を臍の前で、両手で抱えるように持つ。この仏像は発掘調査の成果と、身体的特徴等から7世紀後半の百濟仏で、朝鮮半島から持ち込まれた可能性が高いのではないかと考えられてきた。

令和4年（2022年）鞠智城「特別研究」事業で『鞠智城跡Ⅱ』報告書刊行以来、初めて、仏教美術の観点から研究が加えられた⁷。引き続き菩薩立像と鞠智城築城の関係について研究が進むことを期待したい。



貯水池跡出土 銅造菩薩立像

（5）花崗岩加工技術

鞠智城では、鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）に城を管理する建物や八角形建物などの施設が整備され城として最も充実した時期に入っている。長者原地区東側から上原地区東側にかけて、「コ」字形に配置された掘立柱による建物群や、総柱の倉庫群が作られる。更に、鞠智城Ⅲ期（8世紀1四半期後半～第3四半期）以降、掘立柱建物から礎石建物に転換が図られ長者原地区東側一帯において掘立柱建物から小型礎石建物への転換が始まる。

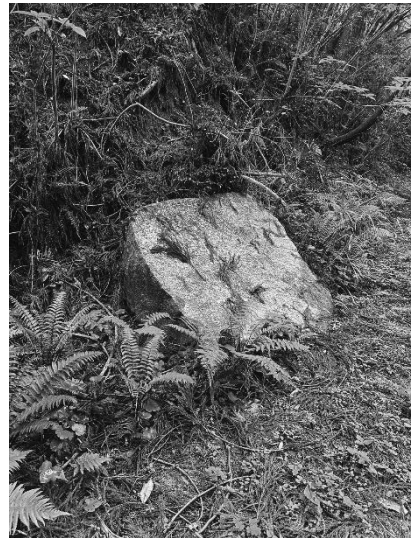
鞠智城では、これら礎石建物石材の多くに花崗岩が使用されるとともに、3つの城門の唐居敷^{からいじき}にも花崗岩が使用され、堀切門跡では最大長3mを超える石材が確認されている。鞠智城周辺は先に選地のところで地形・地質を火砕流堆積物上に築城されていると解説したが、鞠智城灰塚から南側、西側土塁線付近から西側、有明海側に向かって花崗岩地帯が断続的に存在し、その東端に鞠智城が所在している。現在でもこの周辺では山中に入ると1m前後の花崗岩転石を容易に見ることができる。鞠智城で見られる礎石等に使用される加工は主に、簡易的にノミ等による敲打技法による整形で形そのものを割り出すなどの整形は見られない。

国内では花崗岩の使用は古墳時代に始まり、菊池川流域の史跡大坊古墳⁸、史跡永安寺東古墳⁹（玉名市）では重量のかかる天井や楣石に花崗岩が使用されている。しかし、その後は比較的加工が容易な溶結凝灰岩の使用が主流になる。その後、花崗岩が国内で再び注目を集めるのは6世紀末の飛鳥寺造営時以降の寺院造営まで待たなくてはならない¹⁰。

飛鳥寺造営時に百済から版築技法や花崗岩加工技術が工人らにより直接持ち込まれ、その後の国内での寺院建築の技術が確立する。この技術が、その後本格化するヤマト政権による古代山城築城に用いられたと考えることもできる。古代山城築城に際に百済からの亡命官人らの技術的指導があったことは文献等で確認されるが、城を築く場所（選地）、防衛目的での土塁（版築）の技術をどこに使うのかなど、城を築く思想がこの時、日本列島に伝えられてのではないかと考える。

最後に鞠智城で用いられている礎石群を構成する花崗岩技術に注目してきたなかで、鞠智城の礎石建物に一定数、花崗岩以外の種別の石材が用いられ続けていることに疑問があった。入手し易く、白色で見栄えのする花崗岩のみの礎石建物は1棟のみで、それ以外の礎石建物には花崗岩とこの地域では入手できない石材が混在して使用される。そこには各石材の産地から鞠智城築城や繕治のため集められた地方勢力の姿が垣間見える。

8世紀以降、防衛目的の城から倉庫群を伴い役所機能を有する城に変貌していく鞠智城が、ヤマト政権から地方勢力にどう引き継がれ、地元肥後の地方勢力がどう関わってくるかに注目したい。



南側土塁線尾根上にある花崗岩転石

¹ 『続日本紀』文武天皇二年（698年）五月二十五日条

² 熊本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』－鞠智城第8次～32次調査報告－熊本県文化財調査報告第276集 平成24年（2012年）3月

³ 古代山城サミット山鹿・菊池大会実行委員会『第2回古代山城サミット山鹿・菊池大会報告書』平成23年10月開催

⁴ 岡田茂弘「三 城柵の設置」『古代を考える多賀城と古代東北』青木和夫 吉川弘文館

⁵ 全赫基「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『鞠智城と古代社会－第10号－』2022

⁶ 小山田宏一「渡来系の土木技術とため池・山城」『渡来系技術から見た古代山城・鞠智城』鞠智城シンポジウム2022 熊本県教育委員会

⁷ 村上幸奈「鞠智城出土・銅造菩薩立像についての考察」『鞠智城と古代社会－第11号－』2023

⁸ 玉名市教育委員会『史跡大坊古墳保存工事報告書』昭和54年（1979年）

⁹ 玉名市教育委員会『史跡永安寺東古墳・永安寺西古墳保存整備事業報告書』平成18年（2006年）

¹⁰ 廣瀬寛・高田祐一『日韓古代国家成立期における石工技術の比較研究』